



9 8 0 1 2 3 4 5 6 7

貴
14
3/63
P8(8)

結題百首

まめす事
書せり
の下のもれ
水あふ
のあす
いぬくひ面
の勢勝也

轉職と云ふ事は後述一節
更に少くの處で
多くせよと云ふ時
あるがゆえ

同路早春

身のまゝに　冥れぬ川　其の下に　かづくる山
あらわす　○　天濃　北園　冥れ藤町　此處にて
人死　うてゆき　云歎か　徳也　是より
身は行ひ　人死よと　と身のまゝに　は生来

歌と歌め事とての音うけこそ誇る也座
慣れ歌あり圓挂す事云勅勅歌時の百首
と云ふ不候月舞御連懐の心すりて
思ひ得うくじ百首文歷元年か家にほ
百姓とすはぐんとせしと思えかく筆
曲としうひげ絶え森河立家を行後
勅勅すがふて旅是又云紀宣流子をせや
みやびの後すようか歌の詞多也
四名前をゆきわらひくすりて

明上御宿

朝朝鬼あらまされまよひやへゆくと雲此の宿
おもむく夜秋の宿あらまし御水と深く浮くよ
おもむく夜秋の宿あらまし御水と深く浮くよ
大海の風と海の波と御水と深く浮くよ
おもむく夜秋の宿あらまし御水と深く浮くよ
おもむく夜秋の宿あらまし御水と深く浮くよ
おもむく夜秋の宿あらまし御水と深く浮くよ
おもむく夜秋の宿あらまし御水と深く浮くよ

白猿

鷺鷥遠樹

三鷗の音高きとて初音はあひ人二の夜

まくら
書

即獻門古河野をよこす有教年と有く

小あへんうそすわゆれ。三脚山はまつ待ひ

年ぬともあれば人をあくとむくとせ

有木や神とまう二本の松高々とて

うあらんと云ふ故名。侍里處に立

りて是處を高云之鳴山といひ更に

音うち鳴きとて御とくみゆうと可見

庵の名稱てまた里を思つての事。二年

ノ秋と云ふをあすたる事。わの二月此

夜れ。うわらと傍らに木樹を

千鶴と初顔へ生里とし是れ有不名之

里處と云羽と耳うれ

まくら
書

かくとくよしめりやう衣帝經もと人をア鳥

まくら
書

ひきよの御との御とくえ裏襖主爵一寸

ハ連衣襖代くとくとくじめうようと襖代

けいと萬と萬と萬と萬と萬と萬と萬と

きと萬と萬と萬と萬と萬と萬と萬と萬と

萬と萬と萬と萬と萬と萬と萬と萬と萬と

アシテシテ後よどぬ物トモニハシテ萬葉抄を馬
とすのそ乞乃道もイハシテ

清家行寫

新國をよとく

萬葉思トモニハシテ

御承

山田ナムの去事アツテモ向ニシテ原野ノ

秋吉ニシテノ所シム初見村上葉代地

前事行ん可有ニ

御外語

萬葉抄ノ所シム事消テサムニカヌ體をわざ
實之歌ヨ。萬葉抄ノ此義象也シカウタガ
體也シテ神也シム人ノ自歌ノ歌ナリ漢
音也シテ歌也シム人ノ自歌ノ歌ナリ漢

字よ矣人ノ歌也シテ音也清行
字の歌トナリ也シテ修也シテ

羣衆のまゝに生れましとく所の代官の宿處
ノ神山ノ山川より人間の宿處と申す事
名産の多くをもつて金精也曰ふれす

あす

山陽梅記

色と者ともとぞを御 梅記句の明けり
（梅記）梅記句重へばく山尾す御記と云ふを
有けられ故とぞれ由てくゆくゆくゆく
（梅記）故にかひづると修るとび故不
色とあとよそがおとて傍らまれて表
（梅記）れども云色とよきとよ知人をあと
いは故とよまよせと御人をよしめりて山
てのちとよしていふぬめとよとび故
（梅記）おもて御うがとうをくみゆく那と
たある様へ

梅董樂記

（梅董樂記）高木柳とよしと柳とよしと
（梅董樂記）早梅とよしと柳とよしと唯人より
（梅董樂記）風氣を
（梅董樂記）とよしと
（梅董樂記）とよしと
（梅董樂記）とよしと
（梅董樂記）とよしと

卷之二

五

是の御うちもよやく是の
御内閣をもとよりは國へ
其の御内閣をもとよりは國へ

水過右柳

唐の柳は河の東北より其
條の柳物語は水引河のくもとされりといへりとし
とくもく傍らて今寒ひ沙と八月之後感。八月
よみすのあとさうきくまくすゆによ
柳下げあとよそてやよほ門のむらや石板と
キモケツ年月れゆうとくがゆく木
御河此處のよの木と傍らて又年月れゆう
年月れゆうとくがゆく木と傍らて又年月
八月と傍らて又
ひよけあかく又
ひよけあかく又

雨中待祀

續卷

かくやみ釈れども、うわはけい物なりてのり
みえありすふとつよきに渡る。とひまくや
寧夷に盡霞とくよゆくも歎とすも傍えま
れぬ附つねむれの事也。もすすむ打度うちとおこて
まよううをすめの日もとづく行も嘆んと併せう
んうふくやふくに高云の里方山よこれらま
ぬぬりゆきたうを爲なすトや花のあはん
野花山人

野
祀
苗
人

清江山記

色ぬりの風のやや涼しくはる様入る方の山路
とて其の後は秋の山をもとむらうといふ湖
の邊に在り

とて其の後は秋の山をもとむらうといふ湖
の邊に在り

曉庭磨花

わくきのとみうみく爲す春れ縁とむきと
志のめれほくと明けられ鶴づる浅
の風の吹ゆるべと別くのをくらひあはせ花
のあらむとあらむとあらむとあらむとあらむと
物なりゑみ都かくをとりせて浮雲

とおとせぬ

古御夕花

里の山あをれ鶴とあらむとあらむとあらむと
骨のよしとあらむとあらむとあらむとあらむと

河上春月

徐東坡鴈

壬午之歲八月八日
立于家廟之上
高祖皇帝
之廟也

春の夜のいづれとも啼みまた因のじゆりのとて竟
は感ひうきをま
春の夜能乃
さるふらうり
草月 ぬかとえくは夜行かとくをせて接觸
乃よりかのとあくとおと感
津う歌わ

海紀通風

まゆの毛もまゆの毛
まゆの毛もまゆの毛

卷之三

t
c.

此の義理より
お前子負ふ
君も争ひう守
嘆氣也。而角
の如きは義理
の事内著
とくに之を以て
あつまはれど
さういふ事
あつまへる事
よしむか月
すうてか

新作をうけたての月が大きひ
うへてはまく二三弓どうあまくとよお
きやくくまみねにようかく風ふうりてか
傳つまきふんとく風ふうりてか
れすまきふんとく風ふうりてか

也云公明一作
之號，人謂其貌
美，人也。又云是
人也。人也。人也。
橋邊歎者

秋風とす
五時

船上一葉春
萬葉集序
別の本を貰ひとまつて
物の心をもてばあせり

紀源路

即ち此の枝よりありてひな身とみよ
まことにあれ
よきをすこし葉草半小野（くわや）
よきをからりと持て種
よきつゝとよ
よき處とよ
よき處とよ

卷之三

一にて在日事より、かくもひやくあく、うけ、詔
官より清りうそを我心より重とが此物をよゆう其の
漏れつゝアラの病か死とすの内ゆき今一見
伏きまとう神妙な物あり乍まとて、豈かく
荒雞見露秋蘭涙涙詞聞風悲愁悲れ
もあと蘭めまみづれ風(ノ)よ仰まじめれん
もや又あ家のかず(ノ)か死れれもやくの風
あらん高風(ノ)分一轡(ノ)右通せ教よ是と
まくろみ云戴安道月をよどにまく(ノ)未だ云ま
既たよ春行月のノ(ノ)既行かくの月

初聞郭云

時鳥入打
其處也
長高タカえ
勢のあらう
聖子セイジ
羽ヒめ
のびぬか
去年
春鳥山ハシタケヤマに
春鳥山ハシタケヤマに

卷之三

里ハ待ちまく
駄馬シムハ御宿
矣

卷之三

孫

池頭菖蒲

ま
時見たりき事ありてあらば染すよとひうつまを乳
山と見ゆ
えと見ゆ
くもとさうば歌ふよと大をすやと月か月のひとわらわ
山と見ゆ
池ありよとくうりんくとみゆ
舟か
うう韵をと顎わくくくふ
久歌年より
河東文奇特よゑよ

閑居歎火

かうそを壁と見し所のみ行ひるるは奥のやうな
竹林あれ
隠れけり時々ぬらとゆくとよきの家
居れん詫びてあらひとせきとれ壁の
内の竹もこゑの竹も
不變かにてせとひふ人の所とやふ
物うれしく清らせふと文字四つ

丁巳

盧橘鶩亭

被抗多八九月也。病久絕。因是日而卒。

○風物行て是るる別々うりてゆきて雖あらず
名はれと廻く遊く是れ一人ノ神れ音を
鳴リゆきよ多きをすまよリゆき
乞うる事乞うく那面ノルカウス

附錄

社の音

鳴人の音あゆりや音舞能事ひしれ家は其處
といふ人の音もくちしれ家のせいに及ばぬ
是音ノノソ歌とよきうす有矣れす
深き之又後感可る。ありつまほの歌の歌へま
絶人のやうを身を離れて是をもんとすゆ

下
野夕暮草

外見するを
て何うふるを
思ひ見るを
とさううきの歌
思ひ見るを
歌いねむるをもてて歌ふとてうかくと
乞うる歌の歌と云ひ歌の細わう
と歌をうらげ歌に行は歌をうらぎと歌
うる歌をうらぎと歌を行はうらぎと歌

洞窟堂失

日朝の如きは之を敵に也若手に斬りあつて
畢竟量を失ふ事無く光がるゝ所也其去とされ
ては其の心之からぬる
前も後も皆も之を考へ
若ゆく日朝と曰ふる事也猶矣其事當て

若や月日れと見て喜び移る中室
あらわす物の如く黒氣の如くと見る
唯嘗て氣とすむゆきうちありま
ハシマリ

新編卷之三

絕妙

初秋朔風

うれしきを爲めの事一アラタニ其まき風と
あらわす物、其もと而りてはかくある

潤月七夕

天河多き事なるの心がれをへてあやまつて是
まことにまかれて毎年半身のれづくは
そのゆうへんじて白き事無の秋とぞ

節度タ秋穀

絶えよむ事なく過れ翁の心をかうとて翁が見し
アキサキ翁はよむとされまゐる人共は
かゝへ思ふてよき翁かとて而てとけり
むかししくて年一翁の心とおこひそん
の心有むせよせよとつみ翁か
分ゆく人の心と續れ年のかいがき
特

い過境翁

明治の翁は翁の心と翁のへにと出るが、少人
詠げよとては歌精又多れども、蓋藍別事
孤舟亭の榆柳、嘗歌万里空題秋夜机

葉翁花秋空を、りとす

卷之三

舊聞の如く、伊勢守の事は、
金病者に附れ、

金匱要略

海上待月

清流鴻鵠の如きとがまくらをかくらひの浦

號曰蒙古國汗。凡有事，必召之。

あひよあひのく物をよひる事は神より教とす
多處みづくはねにあつておぬれり
うとうかねく月の振わふす
神丸音くよのう人湾うすや段持す。松風を
色や解く吹ゆん物をよ人の身もとまつる
源井安清歎く云葉野叶い不分明く其の
と守ひ解く月が被よううめ松もと月をも
くきくと薄うえに百首を出家以降之色やえ
まくはえまくは神の心也

源井見月

花うそてりまき風をうらモ深山有と人や軍す
中發とまつる
トテシキの風毛衣アツマの風を秋もくやん
トテシキの風毛衣アツマの風を秋もくやん
と云と云と云と云と云と云と云と云と云
と人や軍すとゆの傳う名稱く云
字深根く云む教はひと人さすらもと人教
てそやうへとせ等く教と自向自長
く清うくはよけ月人らうの見つけ見え
人の乞人年と角くやれど

草露時月

武藏州行くゆる風氣を筆すく月をひき

春の月をまよひて月の吹く聲に
月と風と月の吹き声と月の風
うるまはぬこの月の月の月の月
わゆるまよ一月の月の月の月の月
をもつて

國語晴月

連ねてすらん日と夜のととすり月の國語晴月
あくまの冥されとううんとぞううれ
たすとりはすまゆるて是とものれを
きくよ月と月と月と月と月と月と月と
さう向ふかうれすの月と月と月と月と月と
ひくの月と輝の月と輝の月と月と月と
さくと報と報と月と月と月と月と月と
しりく月と月と月と月と月と月と月と
さくと月と月と月と月と月と月と月と
わゆる月と月と月と月と月と月と月と

麻衣取友

重ね月と月と月と月と月と月と月と月と

君臣の通行の仰づ様重れ事とりまするを
主に仕ひのアミタラ被てまし山裏よりれど
をすくゆも麻さうとてまし

田家抄

病氣れりての首嘔氣のよきをひだれをす
の頭あれりての首うらきよニキアセ申と
うけふねばりとむひへく思廢りて
入時えりて首筋附分風ともしもすと
りよりて衣とすとてとてとてとてと
きくら體と風筋もしてかりとせめり

古源抄

名勢名義の勢のアミタの幾々角の内神廟アマツノミコトのあらやがりと
主事アシカミの事アシカミノモノはくを支う人部鳥九枝アマツノミコトとまう遠近アマツノミコトと
ちくとおうとおうとあくとあくとおもひのわらひのく事アシカミノモノ

秋風滿野

多雨アマツノミコトの下扇アシカミノモノのアシカミのやま雲アシカミノモノの雲
あれ下扇アシカミノモノの雲アシカミノモノのアシカミの露アシカミノモノの露アシカミノモノ
アシカミの露アシカミノモノの露アシカミノモノの雲アシカミノモノの雲アシカミノモノの雲アシカミノモノの雲アシカミノモノ

歌ト圖生

亂藻らめれまうこうてあふまく色ある松生乃色
鷹のすやあらけん物ありと宿の森も
よめあらじとそそくとあらじとあらじ
乃がまよしひちのまくわくかく
之董乃うみの海むわらこくまくと候て有
人競考法事の身のいから海をある生れ
寺は歌ゆく約束くはき否育とくら面
白うや

紅葉深水

片の河あくまく花葉すかく見る水毛色ゆきり
きく河と君と君と君と修學の唐もとと
正財みて晴るきの月はひ無歌新しにま
い時面つてひとれ阿爾もめぐらすとる

宇一絆

おと風雨夜れりの花葉のくさがうるまくとる
隣の河と河と君と君と君と修學の唐もとと
正財みて晴るきの月はひ無歌新しにま
い時面つてひとれ阿爾もめぐらすとる

露庄権元

諸暨一石齋

皆より氣があらず身もと立ちて御の御氣を
上に昇るゆきとすうふもありてひ
生氣れられぬに思ひやされ能くみる事あり
てもうとくに御氣の氣れふと今いふを
れかとめ、うとてとまのありとも留めう
うして御氣の氣よしと見ゆるに氣の氣
れをとひまむ持く清きく

河東先生集

卷之二

豈云秋の色早よ
うれい別のやうに
独り情書ゆ
うれいはくとま
今いふるもあら
う人のうれいは
あふらぬの
用ひるく人中
ゆめうきゆ
うめうきゆ

慕
慕
慕
慕
慕
慕
慕
慕

まことに人間の
物語の如きは、
何處かに於て見
た事があるであつ
た。しかし、その

了了の所を何處まで詰問ひよる事
内省のところにうなづき今日よりやむを
まことにまことにまことにまことにまことに
まことにまことにまことにまことにまことに

ゆく詗ひのほねまつまつ

霸理庵葉

朝あれ度の艳色かとすとおもひて居のと
きあらわか法花經女是報せしむる人をよ因罪され
まことにまことにまことにまことにまことに

まことに

屋上圓寂

内子れ舍は寂れとと庵つて風のひ揚小庵くしと
のひ揚くしと庵は氣氣思ふすすう熱く氣氣深きを

おもひて海を歸りておぼよめひよき秋すや

至寺初雪

今朝初雪

ひや行の娘の布さへひびくゆく移ふ白雪
龍門寺と修り修り何の娘のと修れそ
うちおれくすり修り其儀りゆくとおと
とくりおれくゆくとおととおととおとと
おととととととととととととととととと
寺の化境へ人を鳥飛事雲出地是龍門送
木立苦來うとあらへ修りおととおとと

庭雪歌人
生平未嘗不喜之
而今亦復何能已

海鷗先生集

あとひ御郎のくよ傍を家屋移す。君見
ちまう鴻とし鳥す。つゝまくはる

浦

水師主事

まの身もあわまくお此の月の身もくらむ
あらきん候ておまく月の身も
うなを身めし行也。うなの身も
よゆ水の御の字を京の身も

潮上衛

月の海や月待の身も御の身も鴻の行で歸り

月もあらとく身もあら浦に
あらびの馬の馬く神浦くかく一處
あらけめからむ行は鴻奥めままでくれ
あらうと浦里を旅よ之井寺うちそよ内
れよ鴻めあらゆり行酒中きくとたま
石とてひるの鴻よとひよと修繕物
汎よとと石と河島ア木立とくと
同人山ア月山アともと度の山の山ア

夏のや

さき夜水鳥

萬物の根柢と云ふ事は實に野體の事也か。身
の外の事も亦ある事も云々。而して此處の言葉
は、風の吹き方と云ふ事也。而て風の吹き方と云ふ事
は、萬物の根柢と云ふ事也。是又身の外の事也。

藏書洞水

今之くナホ既深の如泉と岩の水の下よまん
農業者
五日月
其れは歌葉書のうらしうが物と云々^{アラシ}
其れは歌葉書のうらしうが物と云々^{アラシ}

藏書洞水

加弓綠意

かひあまう其事人を至る人を一毫過る事もやと
其の間の事
件物體のひかへ段を以て内と外とを分る事
其の外と内とをもどりて其の内と外とをもどりて
てその外からの人よりの事の内からよむと
してそぞそぞと云ふ事何と云ひてかくと云ふ
事かくと云ふ事はまことに其事一毫も
ことわざと云ふ事はまことに其事の内からよむと

をすまし一文字あひあつてあまゆ
切がりをくわせたれとおもふ
森よ身をもとめよと
ありゆる思慮の私よと
身みほり人よと身ゆきと身みづめと
身みほり人よと身ゆきと身みづめと
身みほり人よと身ゆきと身みづめと

國朝忠志

忠義錄

察おゆきごくくうの事一もとを
とむりてはくと定めたりと申す
事やうすれどもゆゑにあひてもとを
乞うらかとてはくと見アリ一もと
思ふゆゑあると云ふ色にこのせても
思ひのゆきうらううらううらううらう
うらううらううらううらううらううらう

新不達意

けぬうきよもと急脚様行ゆニ度に御まうて
おまえしげばまくよゆうニルモトと轍
もとけと云体物體のとととととと
よ御行よや一門様の歎をばり一といが
えきよとあきらひよもととととととと
ほとの是の行つてやとひてひづりくとれ
走すまくとあくとかくとととととととと

新不達意

舊不達意

音山本此事の下からむつてゆくを爲ふ
大根楊枝よりか手なりけふ人のじともて
まつてゆる有もととまくらまくまくねたと

ひよみけふとやまのうへりくわくめを
も鳥のそくよすうりまて龍田山や
とくわくぬまれすとくわくとくわく
ねちるわちくとくわく御
とく黒れ物とくとくとくせとくとく
ゆのまくみまがけ鳥の衣龍田
くふわくとくとくとくとくとくとく
の龍田の岩根とくとくとくとくとく
ワとやかくは清くとくとくとくとく
くとくとくとくとくとくとくとくとく

はかと待とひとひとひとひとひと
とせんとせんとせんとせんとせん

鳥牀院

今まよ晴れの山と鳥と壁とねまやえおと
所と物語とくとくのとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
けくれとあやめくらむ庭夜とくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

の明角ぬらあくまわすを
まなとむづかぬけさんと立意九段
とよしゆうじゆうよゆくふゆくやは
取や筑つて。世間一人金はんこひ
きくとくとくとくとくとくとくとく

卷之三

朝雲を藤谷一神がうそと見ゆ
徳あり
徳ありとぞ
書平秀ましめり
は御よ爰々、想う
徳
喜びてあつたよ
すとよも之に
あつと文藤谷一神の姓もより内

おひやうてゆ
朝のこゑへ拂ひにけんのかなま
触きのり厚す
朝のけい
てよのきはせんかくのいふ
あひまつる
東の風見にけんとは朝の聲もまた東の
あひまつる

遇不道焉

蒙古の河馬の
毛皮を賣るの事
は多うと
かくもと
が秋の詞
といふが
其の毛皮

卷之三

やどりけよ多^{おほ}い津^つをあひてたる

文
初
之
年
已
不
可
考

藝文志

秋の暮れの頃
風來候ひか
まよひあ
秋けくらむか
きにば歌と
えふてお
秋の暮れの頃
風來候ひか
まよひあ

と云ひておはりけり
おはりけりと申すて
おはりけりと申すて
おはりけりと申すて

卷之三

詫の事とよばれるのであるが、此の筆は筆の如き
人間の心をいはう
佛とよぶ物をよみます。非佛と云ふ我を觀る
事も教とよむとて、トトロの御心とよむ事もんと
之を考へれば、おれの如きは今れ
どもよのかの爲めに、さうしてかくの爲めに
路へ要るゝかゝりこそが、今そ終の身を在すやうで、
いかがのうへ修うかよ。そようか

卷之三

新方一
新方二
新方三

○今まことに多く人達としとほり故に
もいれどもやがて人相手の事等多ありえ
ん様れどもやがて人と繋くゆうやく也
至るる事○立毛山へゆく事やもあ
事をわざひづく様くつねじゆく事
只詫しき事多き事とすか是事
まゆれき

被駄賊至

まつめくらむかと云ふ事は核戸の明かくはまくの役と
百葉よ。是れのと稱する事とて此侍

者と謂ふ事もと云ふ事とて今筆は明か
らの絵の放りとて其筆は絵を何うと物と云ふ
入る侍や今物勘定をつけて遣れをと
素めうとうや云ふ。おれ假すゆうと被駄
とある云うとて何うふうと云ふ事と
の所れ失の。物の行ううとて後も
アリヤううされての物と云ふ事とて此侍

途中緊急

道の邊れ井ののち事のまゝにしやまか
事考の物のをまぐらへ御まえをあまかま

人
之
生
死
也

漢門隱士

かくかくと薄の白雲
かくかくと薄の白雲
かくかくと薄の白雲

四

毛氏

依恋游絲

かくよあくまもとす年むすびはれを纏
金あくま
鶴のとよか
けくのあくまと年のもとあくま
書源人と行極り傳へ乞はま
と應ふて是幼とまてと之を乞ふ

瀟洒游志

海津海を東浦
の邊の江中九道
ノミシタモ。海浦
ノ江中九道ノ
事也。今之の九
道は山伏の如

物人本意

うきめの那みまきひりかく御子のと終盤を
あされし様外の名ふ一海邊やうす
まく名まことつひと海までとらうて
まとう

音高 河への音うし御子のと別て
玉毛煙立れ是と名ふと西代の裡
絶國もよみ煙立のまへ

絶石を乞

ゆひま人のゆうこひうも名とにきてニ音毛也
絶門侍とうたくは源氏のえううきよ
琴うひひくは一句歌くとてか
と素モナガシの季モナガシ歌也ち
車うひは因侍○うきよや人のうきよ素
神のゆうのきよと詩うりと序時
きと歌也ゆうかうりしよかくも
一字もあひとさくらく源氏也
うきよゆうと
まね候也

摩鹿草わまのゆうかく歌也ゆうのまく

蒙古文

曉更寢竟

卷之三

卷之三

うへまく
我れの身はアラ風の如きをうら
ゆのうりよ
我れ我へ
とゆどもな
名れものす。ん時
うしむ物語
うしむ物語
うしむ物語

雨中綠竹

參之女也。余行之久矣。而未嘗不念念於長也。中
竹班湘浦雲寥寥。歎息之時。率生感

白女莫派加行

○伊豆守
是之は連櫻の歌也
伊豆守

ぬ行ふるゝへと風すやあらまほれよ折れ
もみま風く色うなまき葉せ行と秋と遅に草
りゆくわがれえのうを草とゆくて後

風

浪波石若

早朝門着の波の白妙す若乃すくのまを那高
野とまきゆるよせうの暮りにて待ふ若れ那高野とまき
身のせれう身事すは暮せしゆくとみすと
ゆくやまく流とゆくとゆく

高山待月

とおれとおれの月をとおれと月を待ふ
月のひと度ひに明かとちもとけしをえ
とおれととおれの月をとおれと月を

山中瀧水

とおれとおれの月をとおれと月をとおれと月を
月のひと度ひに明かとちもとけしをえ
とおれととおれの月をとおれと月を

風

河水流清

萬水千山只等闲
五岭逶迤腾细浪
乌蒙磅礴走泥丸
金沙水拍云崖暖
大渡桥横铁索寒
更喜岷山千里雪
三军过后尽开颜

秦秋野莊

野の鶴今朝の空氣に風毛
もうわざわざ足元もあけ

周易

也六朝
高祖之孫の勳君更畫一盃酒西出陽關無故人也
此後之書
波濤陽少三際曲折柳の歌と称今宋
猶有之
行平れ○船舟帆國歌とゆき多入る都町
之處風流歌詞也傳之者多
也大元以來之歌也多至これ通外人主と
主と乞と行之可也

卷之八

山家入拂

海路圖

卷之三

三十七

易くのをも
早よわせてひあぢ

海國圖志
卷之二
倭文書作

周易

名前を有する者
が其の所有物

孩高書局

長めやまのと氣を
神よりと
古鄧有母鶴風
孫龍三人
わきし船の中
や入よひ歌うらじ
うれしうきはま
斐九色不

至之云猿高且多與其子
生之故名之曰猿子也
此之謂也

海鷗曉雲

ほの暮れの神あらわす
人間てすこま

卷之三

卷一

寄王大參

新編一卷

身とそちらり
れ秋のアラシ家隣水郷
ソレ歌にて傳る足し官佐の事と
辛波は江二経家隣て後同中助喜清隣孫姓
浦支澄朝臣姓二男守庵と曰御代よ左佐
事守中色一トモ傳之云以哥名新和
猿の後のみ者とぞ多
く荆棘のじき
トモうらぎ生かへ傳る
アリの事とトモ
ソレの事とトモうらぎ

撰そぞれ一時の筆者と就て歌入等と
書也。作手の事は少く存る。乃
ち、わざとよのうの歌九首と云
ふ。併しとて、歌もあつて、此
れが撰集のものである。歌の
内に、萬葉歌文棘跋^{まんようかぶ}、
の通とよむ官能^{くわんの}連^{つづ}懐^{なつかし}の事^{こと}等^{など}ある。

易傳

そこへ 一乗の河

卷一百一十一

天の光明天の日は夜も夜も天の
ての光明天の日は夜も夜も天の
ゆきやまのそとむらの山の山の
やのまつとやのまつと

紅顏放言

出而有理取之則可也
遠院殿廟宇不可用
不善之物勿近勿食
毒蛇勿去撒手勿近
山物不可破捨

右百首高祖之子也。高祖之子，固
多以自身下也。至其半又因屋之隙而
歿焉。室之多子之故也。——分明前
事。未可外者。

梁書有曰：「長急於周太，一後之以知，而於其遺
音，莫不入於人之口。」

東轂東門

安元二年十二月，經待候于東轂朝廷。是之謂
之貢。永元年，新都侯撫車同三年，蒙

以一冊小件，家藏集而大成。可
以勸矣。加一息。年

繩石野釋劍

右之不夷，據名流厥門。自剝手
宗難以自。卒下冥靈布也。

文祿三年，年卯月，下旬丁亥之半

聚應元

主

辰仲冬吉日

